

日本人英語学習者による語用論的能力の 発達について

水野 康 一

I. はじめに

本論は、異文化間コミュニケーション能力の重要な構成要素と考えられている語用論的能力 (pragmatic competence) の発達について、依頼という発話行為を通して検討するものである。初級、中級の学習者は英語運用能力 (Canale and Swain, 1980) のうち、言語記号の知識である文法能力の習得が最優先され、談話や語用論的なスキルについては上級者以上の課題であると考えられてきた。それらのスキルは現実の言語使用の場面で、様々な文脈や表現に出会うことによって習得されるものであり、それにはある程度高い言語運用能力が必要だと考えられているからである。そこで本論は、中級レベルの学習者がフォーマルな英語学習を経た段階で、どのような語用論的能力を持っているかを調査し、さらに高い言語運用能力の習得を目指す上で、必要となる情報を入手することを目的とする。談話における数多い発話行為の中から、今回は最も基本的な依頼表現を取り上げ、大学レベルの英語学習者を対象として、彼らの語用論的知識を探る。

II. 発話行為としての依頼表現

英語における依頼 (要請) 表現は多種多様である。⁽¹⁾ 形式的な問題だけでも、

- (1) 本論では発話によって求められている行為の目的が発話者の利益にかなうものを依頼 (要請) 表現ととらえている。Why not ...?, Why don't you ...?, Shouldn't you ...? などの意思強制文は、行為の目的が発話者の利益になるケースが少ないと考え、ここではこれらを依頼表現の範疇に含めていない。

平叙文(命令文)か疑問文か, 直説法か仮定法か, 直接依頼か間接依頼かといった選択肢がある。例えば, 相手からペンを借りようとする状況では以下のような表現が可能である。

- (1) Please lend me your pen. (命令文)
- (2) Will you lend me your pen? (疑問文)
- (3) Won't you lend me your pen? (否定疑問文)
- (4) I would be very pleased if you could lend me your pen. (仮定法)

これらの直接的な依頼に対して, 間接依頼や, 緩和表現なども一般的である。

- (5) May I borrow your pen? (許可要請→依頼)
- (6) Do you mind lending me your pen? (単純疑問→依頼)
- (7) Would you lend me your pen? (法助動詞 would による緩和表現)

また, 実際的な言語行動においては依頼という発話行為が表層に現れない場合も多い。

- (8) Do you have a pen?

以上のような依頼(要請)表現の間にあるのは, 丁寧さ(ポライトネス)の相違である。一般的に命令文よりも疑問文の方が, あるいは直接依頼よりも間接依頼の方が, 初対面の人に対する表現としてより丁寧であると言われる事が多い。しかしながらこれは状況に関する重大な誤解を生む可能性もある。Pleaseを伴わない命令文は話し手の権力を示す表現として理解されるだけでなく, 見知らぬ人や初対面の人に対して,

- (9) Go ahead.

(10) Call me Mike.

と発話する場合,より聞き手に対する親しみの気持ちを示しているからである。以上のように依頼表現とポライトネスとの間には状況という要素によって複雑化された英語文化特有の結びつきが存在する。

III. ポライトネス・ストラテジー

状況に応じてどのようにポライトネスを表現するかといった方略(ポライトネス・ストラテジー)についてはBrown and Levinson (1987)が包括的な枠組みを提供している。彼らによれば,異なる言語間においても,ある普遍的な原則に基づいた言語使用が行われ,ポライトネス・ストラテジーもその一つであるとしている。人と人との相互関係を築く上で好ましいと考えられている方法はあらゆる社会で採用されているが,その形式は文化によって違いが見られる。Brown and Levinson (1987: 69)によれば,次の主要な2つの形式を基礎として,ポライトネス・ストラテジーを説明している。つまり,(1)相手との親密さ,グループへの帰属意識を示し,相手に近づきたい,好かれたいとする自己の欲求(積極的ポライトネス)を主張することと,(2)相手への敬意を示し,相手との社会的距離を置きつつ,自分の行動が邪魔されないようにする自己の欲求(消極的ポライトネス)を主張するというやり方である。コミュニケーションにおけるこれら積極的・消極的ポライトネスは,ある社会においてどちらか一方のみが採用されているのではなく,頻度や集中度においてどちらかが優勢な状態で並存している。

1. 異文化とポライトネス・ストラテジー

Sifianou (1992)によれば,ギリシャとイギリスは積極的・消極的ポライトネスのうち片方が優性で,非常に対比的な傾向を示している例である。ギリシャでは,グループ内の個人的団結が強く,その言語行動には協調,保護,援助といった特徴が強く見られる。一方,団結が強いがあまり,構成員が押しつけか

ら逃れる自由を奪われている傾向が見られ、また、グループ外の人間との関係も敵対的性格が強い。イギリスでは、ギリシャよりもプライバシーが重視される傾向が強く、親しい者同士であっても、押しつけをしないように、ためらいやわきまえを示しつつ、相手への敬意を表すストラテジーを多用する。

上記のような違いから、ギリシャ人の依頼の表現は、直接的で命令法が多用されるが、そういった依頼の発話行為はギリシャでは押しつけがましいものと認知されず、むしろ親密さやグループへの帰属意識のしるしとして解される傾向がある。一方、イギリスでは、他人に依頼するという事は、相手がやりたいことをする自由な権利を損なうものと見なされるため、依頼の表現形式としては疑問文や法助動詞を使った緩和表現（消極的ポライトネス・ストラテジー）が多く見られる。たとえば、夫婦の会話において、イギリス人の場合、

(1) Would you mind making me a cup of coffee?

という表現が使われることに何の不自然さも感じない。しかし、間接依頼、疑問文、法助動詞の would による適度なためらいを特徴とするこのような消極的な表現は、ギリシャ人にとっては不自然にうやうやしい、改まった言い回しに聞こえるはずである。また逆に、ギリシャのコンテキストでは自然な依頼表現が、イギリス人によって非常に押しつけがましく、礼儀正しさを欠くととられる可能性も大きい。

コンテキストによって、採用されるポライトネス・ストラテジーは異なるものの、どの言語においてもこれらの2種類のストラテジーは普遍的に存在している。Brown and Levinson (1987: 62) によれば、これらの2つのポライトネス・ストラテジーはいずれも人間関係における自他の face (面子) が脅かされるのを防ぐ行為として、同一の目的を持っているとしている。すなわち、話し手が他者に対して望ましくありたいという欲求と、対話者の言語行動を妨害したくないという欲求という2種類の欲求から、積極的・消極的ポライトネス・ストラテジーが採用されており、ポライトネスはメッセージの内容が対話者同

士の間関係に与えるダメージを和らげているのである。

2. 社会変数とポライトネス・ストラテジー

上述したように、英語において、依頼を表す表現は（消極的ポライトネスが中心ではあるが）多種多様である。これらのさまざまな変種はコンテキストに応じて選択されるものであり、その際に採用されるポライトネス・ストラテジーに影響をあたえているものが社会的変数 (social parameters) である。井出他 (1986) はポライトネスに影響する社会変数の例として、(1)自分と相手との社会的距離（地位、権力、年齢などの上下関係）、(2)自分と相手との心理的距離（親疎、好き嫌いなど）、(3)場面や話題の改まりの度合い、(4)相手への負担度（依頼内容の困難さ）を挙げている。Blum-Kulka and House (1989) によると、これらのうち最も重要とされる要因は相手との社会的距離と心理的距離であるが、これらの相対的重要性は他の状況的要因と相互に関連しながら、社会文化的規則に従うものであり、したがってポライトネス・ストラテジーのシステムは文化間で異なるものであるとしている。

3. 語用論的誤りの2つの側面

文化間で異なるポライトネス・ストラテジーが採用されている場合、異文化間コミュニケーションにおいてはそれが誤解の原因となる。非母語話者は第二言語習得の過程で、その中間言語の不完全な部分に第一言語の言語的特徴を数多く転移させるが、ポライトネスのような語用論的ストラテジーについても、母語でのやり方を第二言語に転移させてしまうことが多く報告されているからである (Takahashi and Beebe, 1987; Barnlund and Yoshioka, 1990)⁽²⁾。談話

(2) Kasper (1992: 207) は、これを語用論的転移 (pragmatic transfer) と呼び、学習者の第二言語以外の言語や文化についての語用の知識が、学習者の持つ第二言語の語用論的情報の理解、産出、学習に与える影響であると定義している。語用論的転移が起こるのは、話者が、異なった言語行動に含まれる社会的距離、権力 (上下) 関係、押しつけがましさの度合いや、対話者同士の関係に影響するその他の文脈的要因に対して持っている認識を、第一言語から第二言語に移すときである。

レベルの転移により、目標言語の語彙体系や文法に熟達している学習者であっても、無意識に母語の知識を使ってしまい、誤解を引き起こしてしまう。第二言語話者の語用論的誤り (pragmatic failure) は、文法的誤り (grammatical errors) とは異なり、学習途上における能力不足としてではなく、話者の個人的な人間性的問題であると母語話者に認識されやすいという点で、学習者にとっては重大な問題である。

第二言語学習者の語用論的誤りには、さらに社会語用論的誤り (sociopragmatic failure) と言語語用論的誤り (pragmalinguistic failure) の2種類がある (Thomas, 1983)。社会語用論的誤りとは、対話相手との社会的要因 (社会的距離、心理的距離、場面の改まり度、相手への負担など) についての母語話者とは異なる認識が、目標言語での不適切な言語行動を引き起こす「社会文化的状況認知の誤り」である。前述のギリシャ人とイギリス人の例のように、積極的ポライトネスと消極的ポライトネスとの間で、人間関係の距離を測り誤るケースもそのひとつである。ポライトネス・ストラテジーの社会語用論側面は、同一文化においての個人差が少なくないものの、やはり異文化においてその違いが顕著に見られる領域である。

言語語用論的誤りとは、使用される言語表現が持つ意味と発話の状況が一致しないことによって生じる「表現選択の誤り」である。ポライトネスにおいては、丁寧度に応じて多数存在する表現から、認知された社会文化的状況にふさわしいレベルのものが選ばれるべきであるが、第二言語学習者の場合、学習やインプットの不足から、表現が限られていたり、表現の持っている丁寧度についての情報が誤っている可能性が高い。かりに対話者間の社会的関係が正しく認知されていても、適切なレベルの丁寧表現が選択されない場合、無礼 (場合によっては慇懃無礼) となってしまうのである。

IV. 調 査

本調査では、日本人英語話者の依頼の発話行為に見られるポライトネス・ストラテジーについて、言語語用論的側面と社会語用論的側面の両面から検討す

る。言語語用論的側面については、英語学習者の依頼表現の丁寧度に関する判断をネイティブスピーカーの判断と比較し、それらにどのような特徴的差異が見られ、さらにその違いにどのような要因が働いているのかを考察する。社会語用論的側面については、談話完成テスト (Hudson, et al., 1995) により、特定の状況下で、英語学習者が、どの程度の丁寧さを適切と考え、その判断にどのような社会的要因が関与しているかを検討する。

調査は筆者の担当する教養、および専門科目の学生 76 名を対象とし、本稿の付録に示したテストを実施した。なお、調査対象者の中に 1 ヶ月以上の海外滞在経験者は含まれていなかった。

1. 言語語用論的側面

まず、依頼表現の丁寧度判断、すなわち英語学習者のポライトネス・ストラテジーの言語語用論的側面について見ていく。表 1 は、相手からペンを借りるといふ発話行動において、学習者が判断した丁寧度の順位を、その平均値に従って小さいものから並べたものである。つまり表の上位ほど、学習者によって丁寧度が高いと判断された表現である。

表 1 日本人英語話者による依頼表現の丁寧度判断

依 頼 表 現	平均順位	標準偏差
Would you mind...?	1.95	1.44
Do you mind...?	3.20	2.13
Could you lend...?	3.93	1.98
Could I borrow...?	4.26	1.81
May I borrow...?	5.60	2.13
I would like to...	6.18	2.86
Please lend me...	6.81	2.74
Can you lend...?	7.01	1.79
Can I borrow...?	7.12	1.80
I want to borrow...	9.72	1.29
Let me borrow...	10.36	1.57
Lend me...	11.84	0.41

今回の丁寧度判断の結果分析にあたっては、青木(1987)の調査データ(図1)との比較により検討する。図1の右側は、日本人学習者(大学生)の依頼表現における丁寧度判断をランク付けしたものである。今回の調査(表1)と比較して、すぐに気づくことは、これら2つの調査が、コミュニケーション重視の

図1 依頼表現の丁寧度判断(母語話者・日本人学習者)

(Native)	most polite	(Learners)
Would it be possible (1)	1	
	0.9	Would you mind (0.907)
Would you mind (0.863)	0.8	Would you lend, Do you mind (0.795)
I wonder (0.727), May I (0.714)	0.7	Would it be possible (0.693)
Do you mind if (0.68)	0.6	Could you lend (0.632)
	0.5	I wonder (0.540)
	0.4	Could I borrow (0.469)
Do you think (0.40)	0.3	
Would you lend (0.318)	0.2	Do you think, Let me borrow (0.244)
	0.1	I'd like to, May I (0.214)
Could I borrow (0.142), Could you lend, please lend (0.136)	0	please lend (0.183)
	-0.1	Can I borrow, Will you lend (0.112)
I'd like to (0)	-0.2	I thought (0.081), Can you lend (0.040)
Can you lend, Will you lend (-0.045)	-0.3	
Let me borrow (-0.095)	-0.4	
Can I borrow (-0.136), I thought (-0.15)	-0.5	I want to (-0.438)
	-0.6	
	-0.7	I'll borrow (-0.714)
	-0.8	
I want to borrow (-0.818)	-0.9	I want a pen (-0.897)
	-1	You have to (-0.969), Lend me a pen (-0.928)
Lend me a pen (-0.954)		Pen ! (-0.989)
You have to, I'll borrow, Pen !, I want a pen (-1)		
	least polite	

英語教育が展開されてきた、ここ十数年の時間の経過にも関わらず、尺度は異なるものの、ほぼ同じ結果を得ていることである。⁽³⁾しかし、これだけでは問題の所在が明確ではないので、基準となるべきネイティブスピーカーのデータとの比較において考察しなければならないだろう。青木(1987)の調査には、英語の母語話者への調査も含まれているので(図1の左側)、そちらと比較しながら、日本人英語学習者の丁寧度判断の特徴を以下で検討する。

日本人と英語母語話者の調査結果において最も顕著な違いは、May I...? 表現の位置である。母語話者において、May I...? 表現は、Would you mind...?, Do you mind...? という丁寧度判断の最も高かった表現に匹敵するほどの高位に位置しているが、本調査の日本人英語学習者には、May I...? 表現が Would (Do) you mind...? はおろか、第2グループである Could you...?, Could I...? などよりも丁寧度が低いと判断する者が多かった。May I...? は英語母語話者にとっては、かなり丁寧で、改まった表現であるが、日本人学習者の多くは、ほぼ普通程度の丁寧さであると考えているのである。その理由として考えられることは、May I...? 表現は、依頼や許可を求める簡便で無難な表現として、中高等学校でかなり広範な状況で教えられているということである。つまり、学習者はこの表現に頻繁に出くわし、また自らも多用することによって、May I...? はありふれた表現となり、それが学習者に普通程度の丁寧さであると判断させたと考えられる。学校での英語教育に影響を受けた言語語用論的誤りといえるだろう。

日本人英語学習者はいくつかの基本ルールによって丁寧度判断を行っていることも本調査の結果から読み取れる。すなわち、(1)表現が間接的かつ婉曲的であるほど、また(2)相手に決定権をゆだねる疑問文を用いたり、(3)法助動詞に過

(3) 2つの調査結果で唯一の大きな違いは、青木(1987)の調査では Let me borrow... の丁寧度が中程度、すなわち I'd like to, May I などと同レベルの丁寧度と判断されていたが、本調査では、それがかなり下位に位置していることである。これは、青木の調査票の表現 (Let me borrow your pen, would you?) と本調査の表現 (Let me borrow your pen.) が異なっていたことに由来するものであろう。なぜなら Would you で始まる疑問形の依頼表現は、そもそも丁寧さがかなり高いと認識されており、これが付加されたことにより Let me... の丁寧度が高められたと考えられるからである。

去形(仮定法)を用いたりするほうが、そうでない場合よりも一般的により丁寧だと判断している、ということが、表1の順位に明確に表れているからである。上記の基本ルールのうち(1)と(2)については、日本語においても通用するものであるが、学習者は自分が母語で持っている語用論的知識を英語にうまく転移させ、結果的に効率よく依頼表現の丁寧さを習得しているようである。

しかし、これらのルールが互いに異なる方向に作用する場面では、学習者には多少の混乱が見られるようである。その例として、I would like to...と Please lend me... のケースを挙げることができる。これらは、他の依頼表現と比較して、本調査では標準偏差の数値が大きいものであった。これはつまり学習者の丁寧度判断の「ゆれ」が大きいということであり、データの散らばり方から見て、日本人学習者の多くは、これらの表現の丁寧さを判断しかねているように思える。I would like to..., Please lend me... はそれぞれ I want to..., Lend me... を基本形とし、それらをより丁寧かつ自己主張を控えた表現に改めたものと考えることができる。I want to..., Lend me... は、丁寧度判断においてコンスタントに低くランクされているので、I would like to... と Please lend me... は、基本的な文構造を持つ自己主張の強さ(丁寧度の低さ)を、would like, please という語句によって緩和するという複雑さを持っている。学習者がこの相反する要素をどのように理解するかによって、丁寧度の判断が分かれてしまったようである。

May I...? をよりカジュアルな表現と解釈し、I would like to... や Please lend me... においてはやや判断に分散が見られるものの、依頼表現の丁寧度判断では、中級(大学生)レベルの日本人英語学習者は、英語母語話者の下す判断とほぼ等しい判断を下すことができるようである。日英語の依頼表現に見られる共通性(Hill, et al., 1986)に負うところも少なくはないが、依頼表現の丁寧度に関する理解において、学習者が言語語用論的誤りを犯す可能性は少ないといえる。

2. 社会語用論的側面

では、学習者が犯す可能性のある語用論的誤りのもう一つの側面、すなわち社会語用論的誤りについてはどうであろうか。前述のように社会語用論的知識は、ポライトネス・ストラテジーをうまく機能させるために欠かせないものである。どのような状況で積極的あるいは消極的ポライトネスを用い、また対話者との関係においてどの社会要因（心理的、社会的距離など）を重視するかといったことは、文化によってかなり異なるシステムになっている。学習者が目標言語におけるポライトネス・ストラテジーを完全に習得するには、様々な状況における言語使用を観察し、仮説検証を通していくつかの一般的ルールを引き出していく必要がある。自文化のシステムをそのまま適用して問題がない場合も少なくないであろうが、ある限られた状況でそのシステムがうまく機能することに学習者が安心してしまうと、過度の一般化によって、異文化の隠れたシステムを見落とし、誤解や失敗を犯してしまう危険性がある。例えば、日本人が、より積極的ポライトネスの強いヨーロッパ系アメリカ人を単純に「親切だ」とか「気さくだ」と判断したり、「言葉だけで誠意が感じられない」と憤ったりすることがあるが、これは往々にして目標文化の行動様式を、知らず知らずのうちに自文化の基準で判断してしまっているケースである。

はたして、日本人英語学習者はどれほど英語のポライトネス・ストラテジーを学んでいるのであろうか。本調査では、いくつかの異なる場面設定において、適切な依頼表現を選ぶというタスクによって、学習者の社会語用論的知識をテストした。Fukuda (1997) の調査を基にしたこのテストでは、7つの依頼の場面にそれぞれ4つの選択肢を用意して学習者に読ませ、それらを適切だと思われる順番に並び替えさせた。以下、それらの場面の一つ一つについて、学習者のポライトネス・ストラテジーを検討していく。

表2-1は、学生食堂の見知らぬ学生にテーブルの塩を取ってもらう場面である。表内の数値は左側の4つの依頼表現に当該の順位をつけた学習者の数である。母語話者による判断（正解）は英文の後ろにアステリスク(*)で示されている。すなわち、この場面では76人中57人(75%)が、Cの表現(Could you

表 2-1 学生→学生 (心理的距離大, 負担小)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	Pass me the salt.	3	10	21	42
B	Why don't you pass me the salt.	8	31	23	14
C	Could you pass me the salt?*	57	15	3	1
D	I am wondering if you could pass me the salt	8	20	29	19

pass me the salt?) を状況に最も適した依頼表現であると判断し、この判断は母語話者の判断と一致するものであった。正解率は7つの場面の中で最も高いものであったが、これは日本人学習者が、この場面で鍵となっている社会文化的要因、すなわち対話者同士の心理的距離(親疎関係)を適切に判断できていたということである。心理的距離がポライトネスに影響を与えるという現象は、日本語の文脈でも、英語の文脈でも共通して見られるので、おそらく日本人学習者は、自文化のルールをこの場面に適用することによって高い正解率を得たものと考えられる。

表 2-2 上司→部下 (社会的距離大, 負担小)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	Open the window.	23	23	12	18
B	It's hot, isn't it?	17	19	17	23
C	Would you open the window?*	32	25	18	1
D	Would you mind if I asked you to open the window?	4	9	29	34

表 2-2 は、社長が秘書に窓を開けるように依頼する場面である。前の場面と比較すると、心理的距離が減り、逆に社会的距離が大きくなった状況である。基本的に平等の意識が強い英語文化では、社会的距離(上下関係)は心理的距離ほど、大きな意味を持っていない。それに対して、日本では社会的距離が大きな要因であり、しかもそれが非対称的に、すなわち発話相手よりも立場が上か下かによって異なる形で、ポライトネス・ストラテジーに影響を与える。選

択肢 A(Open the window.)の命令口調がふさわしいと感じた学習者が, Cに次いで多かったが, これは母国語(自文化)の転移がネガティブに作用してしまったケースといえるだろう。

表 2-3 部下→上司 (社会的距離大, 負担大)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	May I have the day off tomorrow?*	23	27	19	7
B	I'd like to have the day off tomorrow.	28	14	18	16
C	Will you give me the day off tomorrow?	15	27	25	9
D	Why don't you give me the day off tomorrow?	10	8	14	44

表 2-3 は, 部下が上司に休暇を申し出る場面である。部下から上司へという社会的距離に加えて, 依頼(要請)の内容も重みのある問題であることから, 非常に丁寧な表現が求められる場面である。この点については英語と日本語のポライトネス・ストラテジーの間に矛盾は少ない。ところが, 学習者は May I...? よりむしろ I would like to... を第一候補に挙げる者が多かった。このことは, 前述の丁寧度判断の結果からもわかるように, おそらく, 日本人英語学習者は May I...? のカジュアルな印象を敬遠し, 判断の定まっていない I would like to... をそのかわりに適切だと評価したのであろう。

表 2-4 警察官→市民 (負担小)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	Move your car right away!	28	12	11	23
B	Excuse me sir, but may I ask you to move your car?	28	13	19	14
C	Could I ask you to move your car?*	12	18	24	20
D	Why don't you move your car right away?	6	31	20	17

表2-4は、警察官がドライバーに駐車禁止の場所からの車の移動を要求する場面である。英語文化において警察官は公僕であるという認識のもとに市民との社会関係に上下がない（社会的距離が近い）ので、ここでは心理的距離に応じた中程度の丁寧さが求められる。ところが、日本人学習者の反応は、日本語でのポライトネス・ストラテジーが適用できなかったためか、全体的にかなりばらつきが見られた。全く高圧的なA(Move your car...)を最も適切とした人数と、逆に必要以上に丁寧なB(Excuse me, but may I...?)を適切と判断した人数とが同じという結果であった。

表2-5 学生→学生（負担大）

依頼表現	1位	2位	3位	4位
A I'd like to borrow your notes.	20	33	20	3
B Why don't you lend me your notes?	15	16	29	16
C I'll be getting F unless you lend me your notes.	3	5	17	51
D Could I borrow your notes?*	38	22	10	6

表2-5は、学生が友人に授業のノートを借りるという場面である。前出の学生食堂の場面と比較すると、今回は学生間の心理的な距離が近づき、逆に依頼内容の相手への負担が大きくなっている。前回の場面と同様、ほぼ日本語のポライトネス・ストラテジーがそのまま利用可能であるので、約半数の学習者が適切な判断を下している。

表2-6は、上司が部下に残業を依頼している場面である。前述したように英語文化では、社会的距離（上下関係）はそれほど大きな意味を持たず、この場面の丁寧さを決定している要因は、相手に及ぼす負担の大きさである。これに対して、日本では、話者同士の社会的距離が重要な要因であり、しかもそれは非対称的な構造を持っている。日本の文脈では、前出の休暇を求める部下と、この場合の残業を求める上司は、かなり異なるポライトネス・ストラテジーを使用しなければならない。学習者はAが適切だとする者が最も多かったが、こ

表 2-6 上司→部下 (社会的距離大, 負担大)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	We have a lot of work to do, so I want you to work overtime tonight.	31	24	19	2
B	Our work is behind schedule, so will you work overtime tonight?	23	28	17	8
C	I'd be delighted if you could work overtime tonight.*	13	16	28	19
D	If you are not busy tonight, you should work overtime tonight.	9	8	12	47

こでも日本人の母語でのやり方が強く反映され、結果として不適切な表現を容認する者が多かったといえる。

表 2-7 男性→女性 (心理的距離大, 負担大)

依 頼 表 現		1 位	2 位	3 位	4 位
A	I was wondering if you would like to come out with me.*	24	9	19	22
B	What do you say to coming out with me?	16	23	21	14
C	Why don't you come out with me?	25	26	13	10
D	Can't you come out with me?	9	16	21	28

表 2-7 は、男性が女性をはじめてのデートに誘うという場面である。男女の社会的関係は文化間・世代間でかなり異なっているということもあり、学習者の反応もかなりばらつきが見られた。インフォーマルな誘い方 (Why don't you...?) を適切な表現と考える者が若干多かったが、カジュアルさを好む現代的な若者らしい傾向の現れであるといえる。やはりこのケースも、母語 (自文化) のポライトネス・ストラテジーが、かなり適切さの判断に干渉しているといえる。

V. ま と め

英語の依頼表現のポライトネスに関わる日本人学習者の語用論的能力について、言語語用論的側面と社会語用論的側面から検討した。言語表現の持つ丁寧度の判断については、いくつかの表現に判断のゆれは見られたものの、かなり母語話者の判断に類似した判断を下せることがわかった。しかし、これは必ずしも母語話者と同じプロセスで判断したわけではなく、日本人学習者は、母語からの類推（転移）や明示的に習得したいくつかのルールの適用によって、結果的に母語話者の判断に接近しているようである。

一方、社会語用論的能力については、具体的な場面における対話者の発話の適切さの判断から、学習者の採用するポライトネス・ストラテジーの考察を行った。結果としては、日本語（自文化）のポライトネス・ストラテジーがそのまま利用できる場面の判断はおおむね適切であったが、そうでない場合の判断には自文化の干渉が強いということがわかった。要するに、中級レベルの日本人学習者の多くは目標言語における社会語用論的能力をいまだ習得できておらず、その知識の不足を、自分の持っている文化のストラテジーで補っていると考えられる。

異文化間コミュニケーション能力の重要な構成要素と考えられている語用論的能力の発達について、本論では依頼という限られた発話行為を通してではあったが、その概要、すなわち、大学生レベルの英語学習者の場合、言語的な側面の習得に比べて、異文化における人間関係のプラグマティックな知識が追いついていない現状を、明らかにすることができた。不可分なはずの「ことば」と「文化」であるが、学習・習得という点では、必ずしも同時に進んでいくものではないことが示された。今後の課題としては、さらに多くの発話行為を取り上げていくながら、どのようなプロセスでそれらの語用論的能力が、個人のなかで発達していくのかを検討していきたい。

引用文献

- Barnland, D. C. and Yoshioka, M. (1990). Apologies: Japanese and American Styles. *International Journal of Intercultural Relations*, 14: 193-206
- Blum-Kulka, S. and House, J. (1989). Cross-cultural and situational variation in requesting behavior. In S. Blum-Kulka, J. House, and G. Kasper (Eds.), *Cross-Cultural Pragmatics* (Chap. 5). New York: Ablex.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Canale, M. and Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Fukuda, T. (1997). A study on the inappropriate use of pragmatic knowledge (politeness level in requests) by Japanese learners of English. *CASELE Research Bulletin*, 27, 1-8.
- Hill, B. et al. (1986). Universals of Linguistic Politeness: Quantitative Evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Hudson, T., Detmer, E. and Brown, J. D. (1995). *Developing Prototypic Measures of Cross-Cultural Pragmatics*. Honolulu: University of Hawai'i, Second Language Teaching and Curriculum Center.
- Kasper, G. (1992). Pragmatic transfer. *Second Language Research*, 8, 203-231.
- Scollon, R. and Scollon, S. W. (1995). *Intercultural Communication*. Oxford: Blackwell.
- Sifianou, M. (1992). *Politeness Phenomena in England and Greece: A cross-cultural perspective*. Oxford: Clarendon Press.
- Takahashi, T. and Beebe, L. M. (1987). The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 91-112.
- 青木信之 (1987)。「依頼表現の丁寧度判断について—受容的判断を中心に—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 17, 163-170.
- 井出祥子他 (1986)。「日本人とアメリカ人の敬語行動」東京, 南雲堂

付録一 依頼表現の「適切さ」、「丁寧さ」に関する調査

A : 下の場面や状況における発言として「適切」と思われる順に並べ替え, () 内に記号を記入しなさい。(あなたはアメリカ人だとします。)

Q 1 . You (a university student) request other students who are strangers to pass you the salt at the university cafeteria

- (A) Pass me the salt.
- (B) Why don't you pass me the salt ?
- (C) Could you pass me the salt ?
- (D) I am wondering if you could pass me the salt.

適切 ← () () () () → 不適切

Q 2 . You (a president of a company) request your secretary to open the window.

- (A) Open the window.
- (B) It's hot today, isn't it ?
- (C) Would you open the window ?
- (D) Would you mind if I asked you to open the window ?

適切 ← () () () () → 不適切

Q 3 . You (a subordinate) ask your boss for a day off.

- (A) May I have the day off tomorrow ?
- (B) I'd like to have the day off tomorrow.
- (C) Will you give me the day off tomorrow ?
- (D) Why don't you give me the day off tomorrow ?

適切 ← () () () () → 不適切

Q 4 . You (a policeman) ask a driver who is parking in a no-parking area to move.

- (A) Move your car right away!
- (B) Excuse me sir, but may I ask you to move your car?
- (C) Could I ask you to move your car?
- (D) Why don't you move your car right away?

適切← () () () () →不適切

Q 5 . You (a university student) ask your classmate to borrow his or her notebooks.

- (A) I'd like to borrow your notes.
- (B) Why don't you lend me your notes?
- (C) I'll be getting F unless you lend me your notes.
- (D) Could I borrow your notes?

適切← () () () () →不適切

Q 6 . You (a manager) ask your subordinate to work overtime.

- (A) We have a lot of work to do, so I want you to work overtime tonight.
- (B) Our work is behind schedule, so will you work overtime tonight?
- (C) I'd be delighted if you could work overtime tonight.
- (D) If you are not busy tonight, you should work overtime.

適切← () () () () →不適切

Q 7. You (a man) ask a certain lady for a first date.

- (A) I was wondering if you would like to come out with me.
- (B) What do you say to coming out with me?
- (C) Why don't you come out with me?
- (D) Can't you come out with me?

適切← () () () () →不適切

B : 人からペンを借りる表現としてあなたが「最も丁寧」だと感じる表現から順に () 内に 1(most polite)~12(least polite) の数字を記入しなさい。

↓順位

- () Can you lend me your pen?
- () Could you lend me your pen?
- () Can I borrow your pen?
- () Could I borrow your pen?
- () I would like to borrow your pen.
- () I want to borrow your pen.
- () May I borrow your pen?
- () Would you mind lending your pen?
- () Do you mind if I borrow your pen?
- () Please lend me your pen.
- () Lend me your pen.
- () Let me borrow your pen.